

大学院重点化の意味するところ —学群・学類教育との分化?—

牧野順四郎

前人間総合科学研究科長

1. 大学院重点化

これには2つの意味がある。これが適当に使い分けられるので、理解するときに注意が必要である。それは大学院の研究重視という意味と部局化の意味である。どちらも密接に関係はしているが、分けて理解した方が混乱しない。

(1) 部局化と重点化

部局化とは、人・金・物の投入先（セグメント）が学部ではなくて大学院に移るということであり、そこが金勘定の元になることを意味する。重点化はこの意味では部局化と等価である。しかし、この2つは違った意味で使われることが多い。

①筑波大学も大学院重点化を実施したので、形の上で人（教員）の配置は学群から大学院に移され、金勘定の元締め（部局）にならざるをえない。これに法人化が絡んだものだから、学部・大学院の形をとって

こなかった筑波大学は学系の扱いをめぐって戸惑いがあった。それは当分のあいだ続くに違いない。

②大学院重点化はまた学部教育から大学院の教育・研究へ重点をシフトさせるという意味で使われることが多い。大学院重点化の第1の内容はこれであるから、この意味で議論することの方が大切である。大学院重点化はまた、研究型大学へのシフトだという言い方もされる。学部は教育、大学院は研究という言い方が分かり易いので、これから研究主体の大学になろうとする姿勢を象徴するために、大学院重点化という言葉が使われる。

(2) 研究と大学院学生

研究重視、研究型大学へシフトするのが大学院重点化ならば、ではどうするのか。よく強調されるのが、学群教育から大学院の研究重視、逆に言えば学群教育の軽視で

ある。

a. 研究所化

最もイメージし易いのが大学院の研究所化である。研究を最重要視する研究所を念頭に、研究重視の大学院はもっと研究所よりの体制を固め、教員はさらに高度な研究を最優先で行い、それによってのみ評価されるのだというイメージは自然である。大学の教員はそもそも研究が第一の仕事なので、もっと研究所化したほうがよい、極端には研究だけをするように大学院をシフトさせる、と考える向きが多いのは仕方がない。しかしこの時、研究所にはいない大学院学生は何であるかを考え、大学院ひいては大学は何であるのか、まで考えてみることも大学人として大切である。

b. 大学院の教育

大学院学生は、ある研究分野で世界の学界で勝負できる優れた研究を計画でき、それを達成できる力量をもつよう教育・訓練される存在である。大学院生は2面を持っている。ひとつは、指導教官の研究を実行できる優れた研究者であること、もう一つは、そうなるよう指導される必要があることである。指導教官は時には苛つきながら懸命に後者を行っている。出来上がった研究補助者がいてくれた方が研究の能率は上がる。では大学院で後者を捨てるか。

大学院は研究中心に生活が回っているこ

とは事実である。学部を卒業したての院生は初め研究の補助者にもならない。優れた研究を遂行中の指導教官の研究を手伝うことから大学院学生の研究生活出發することも事実である。だから、とにかく言われた仕事をせよ、論文を読め、勉強しろと院生を叱咤することも必要である。しかし、それだけでよいわけではない。ではそれ以上に必要なものは何だろうか。

(3) 院生に何を教育しているのか

指導教官が大学院生に教育しているものは、以下の3つである。

①「本質の把握力」

研究には根幹(本質)と枝葉(枝葉末節)がある。研究論文を読ませ、要約を作らせるのは、院生にこれを早く手際よくこれを把握させるためである。どんな長文の大研究でも、極端に言えば100字(語)で要約ができなければ本質を掴んだとは言えない。

②「論理的・体系的思考力」と「論理的表現力」

院生の論文、作文でもよい、を読めば、どの程度論理的・体系的に考えて作っているかが分かる。論文は会話の文字化ではないので、院生にはこれが意外と難しい。論文を早く読んで理解できても、書くのはまた別である。論文読みだけやってもだめである。思考力は表現力の問題である。表現

力といえば聴衆へのプレゼンテーションが重視される昨今だが、元はといえばその原稿作成で②がやはり問われている。美辞麗句による耳ざわりのよい表現を指導するなど論外である。

③「現実との妥協力」

研究に妥協は禁物である。研究の計画や内容が頭の中だけにあれば、それは正しい。しかし、研究は必ず文字や図表で外在化する。理系であれば、現実の実験をしなければならぬので、実験計画を立てる段階で実現可能か不可能かの現実問題に直面し、妥協すべきは妥協しなければならない。

文系でも妥協はある。視点を据えて徹底した論理的思考のあげくに、その視点では解決できない矛盾が必ず起こる。それをいったん棚上げしないと前進できないとき、妥協策を考えなければならない。文系研究の困難さは、院生に矛盾点を明示し妥協を強いることを、指導教官の側からのみ行わなければならないことが多いことであろう。文系理系いずれにしても、重要なのは、院生が何をどう妥協したかを指導教官ともども知っていることである。

2. 学群・学類教育

(1) 2つのコース

大学院重点化に伴い、学部教育の軽視が危惧されると同時に、学部教育のあり方も

あちこちで議論されるようになった。もちろん、これは重要である。ただ危惧されるのは、学部教育は教養教育でよい、資格取得や職業に連結したカリキュラム構成が必要である、などの議論が幅をきかせているようにみえることである。これに大学院進学を加えると、学群教育は次の2つの機能を求めることになる。すなわち、「大学院予備校化」と「教養教育化」である。

どちらも現実がその流れだから仕方がないというニュアンスが感じられると同時に、それでいいのかという自虐的なニュアンスもなくはない。学群教育を軽視してはいけないというセリフはよく聞くが、それは何ゆえにかが聞こえてこないのが少々不満である。

大学院進学予備校は既にくつもあり、文化教養講座は至る所で開かれ、大学人は引っ張りだこである。ではいったい、予備校や文化講座ではない大学において教員が学生に教える本質は何なのか。

(2) 大学教育の本質

大学ではいろいろな授業があり、学生は多彩な知識と教養を持とうとすれば今でもできる。そのとき、大学教員は文化講座の講師なのか。比較的狭い分野の知識を体系的に積み上げていこうとすれば、学生は今でもできる。そのとき、大学教員は大学院

予備校の講師なのか。どちらも否である。

大学時代に学生が身につけるものは、逆に言えば教師の仕事は次の3つである。

①「本質の把握力」

学問研究に限らず、どんな問題にも根幹(本質)と枝葉(枝葉末節)がある。現実の問題は複雑に入り組んでいるが、学問的に見て問題の本質は何か、枝葉の問題は何かを、私見にせよ定説にせよ提示して知識として定着させる、あるいは学生に考えさせることである。

②「論理的・体系的思考力」と「論理的表現力」

教科書を早く読んで理解でき知識として定着させても、論理的・体系的に考えることができるかどうかは別問題である。大学は意識的にこの思考力を身につけさせる場である。そのためには、教員自身がこの力量を持っていなければならない。知識を与えるのが仕事ではないのである。

学生全部にそれを求めるのは無理という意見もあるが、それならば向いてない学生を大学生として入れなければよい。大学生になった瞬間に、彼らは少なくとも論理的体系的にものを考える訓練を受ける義務(権利)があると考えるべきである。

③「現実との妥協力」

自分の考えを他人にはっきり主張するのが戦後教育の売りだったし、今でもそう

言われている。大事なのは、戦前日本では人前でものをはっきり言うことは良くない(悪い)という伝統を捨てようという民主主義の趣旨である。それはそれで結構であるし、進歩もしたようである。

残念ながら、主張するのは結構だが、ただ主張すればよいわけではないことを、ただだけ小学校や中学校で教わったかと問われれば、悩む。現実の問題に対して、ある観点から論理的・体系的にいくら筋の通った主張をしても、反対の見方があり対立者数も多いとき、妥協策を考え実行することは、労力も時間もかかるが絶対に必要なことなのである。われわれは、妥協の結果ではなくその努力を買わねばならない。

3. 私の提言

結論は明白である。研究重視の大学で院生に研究を通じて教育するものと、学群でさまざまな授業を通じて教育するものとの何らの違いを私は見いだせない。これまで挙げた3点の力量は、たとえ不十分にせよ、大学院学生として研究を行うにしても、社会人としてさまざまな職場で働くにしても、大学院をあるいは大学を卒業した者として身につける必要がある。でなければ第一満足な仕事ができない。

大学人ならば、私が挙げた3点に異をとなえる向きもあろう。しかし、知識の有無

で教養を計り、雑学教養で身を固めた、そんな学生を大学院生として集めても研究は活性化しないし、優秀な研究者も育たない。とすれば、学群を教養教育と進学予備校化で再編することなど、およそ大学院重点化にそぐわない施策であることは明らかである。これら3つの力量を学群と大学院でどのように学生に備えさせていくかを考え続けていくことこそが、法人化後の大学院を重点化した大学の教員の第一の仕事であろう。

(まきの じゅんしろう／感性認知脳科学)